

三年より一百餘年以往は延寶の頃なり。此の時代津田道供の孫勘兵衛重次の長男伊織盛昭、其の子兵庫盛尙父子社祠を創立して、寺中の鎮守となしたるもの也。さて、天明に再建せし祠は、本堂の傍にありしかど、明治二年神佛混淆御廢止に付き、社祠を廢せり。其の神像は畫像にて、世に所謂渡唐の天神也。

放生寺地藏堂

龜尾記に云ふ。放生寺の石地藏は、當寺いまだ此地に造立無之以前よりありて、昔此地眞言宗善しう院の時よりの遺佛ならんか。寛正三年の舊記に、石川郡廣岡千壽院といふ寺に菩薩池といふ池あるよし城南考に見ゆ。善しう院と字音よく似たり。といへり。

放生寺狐之傳話

咄隨筆に云ふ。折違町養雲山放生寺三代卓藝和尙は、于世聞えし道人なり。門前に捨子の有りしを狐の喰ひける。和尙怒りて、卵塔の脇築山に穴ありて、狐の子有りしを、おのれ思ひ知れとて、水を打入れて悉く殺されたり。其夜狐の子の死したるを三つ庫裡の土間にならべ置きけると也。

是此子共を御覽候へ、むごき事を被成たりと口にて云はぬばかりなりと、藝和尙語られき。とあり。右築山は客殿の露地さきに、今も纔に其の遺跡あり。卓藝和尙は中興閣越和尙より二代宗護和尙の法嗣にて、寛文四年入寺せられ、元祿十六年十二月十五日遷化なり。

中橋

金澤橋梁記に、中橋すぢかい橋つゞき。とあり。舊傳に云ふ。昔は折違橋と中橋の次に、前田近江守の下邸の邊にも用水川の橋ありて、三つの橋を架けたり。中橋は三橋の中間なるを以て、中橋と呼べりといへり。延寶の金澤圖には、此の橋なし。川筋今と異なれば也。

中橋町

此の町名は、折違町と同じく橋名より起れり。故に世人中橋とのみ呼べり。但し此の町名は、元祿九年の地子町肝煎裁許附等にも記載せず。中橋出來の後町名を建てたるならん。

廣岡町

元祿九年の地子町肝煎裁許附に、折違町廣岡町と見え、國

事昌披問答にも、廣岡町圖書町古道町と並べ載せたり。按ずるに、年代摘要に、享保十二年六月北廣岡村長田村新家願之通建之。と見れば、享保の頃願に依りて、村地をば請込み町家を建て、長田町へつゞきたりしと聞ゆ。但し廢藩後は追々家を毀ち、田島となしたり。

七百坊

此の地は、廣岡町の裏にて、舊藩中は前田近江守の下邸也。按ずるに、元祿頃の地圖に此の地を七百步下屋敷と記載すれば、七百坊といふは七百步の呼び誤りにて、其の地の歩數七百步ありしゆゑに、七百步下屋敷と稱したるもの也。萬治二年十一月居屋敷步數定書に、人持下屋敷百石當り七拾五步とあり。延寶の金澤圖には、此の地邊未だ田島なる体なれば、延寶の後下邸と成りたるもの也。廢藩後悉く家を毀ち、今は田島と成り其の名を稱するのみ。廣岡邊の古圖は下に載する如し。

荒屋敷

或は新家中と呼べり。舊藩中は長氏の家士ども居住せり。改作所舊記に載せたる寛文五年四月南廣岡村肝煎の書付

廣岡邊古圖

